

Minuma Shun Sai

見沼・旬彩

2026年夏号 vol.37

ブルーベリープラザ浦和

ブルーベリープラザ浦和は県内最大の規模を誇るブルーベリー園を1997年にさいたま市緑区にブルーベリー摘み取り園として開園しました。陽の光を沢山浴びて育ったブルーベリーはビク

リするような大粒で、美味しいブルーベリーの品種はハイブッシュ系が18種類とラビットアイ系が7品種ご用意しております。広さは4.5ヘクタールある広い敷地を活かし安心して安全な摘み取りを楽しめます。

<https://www.blueberry-plaza.com/>

摘み取り期間：6月上旬～8月下旬



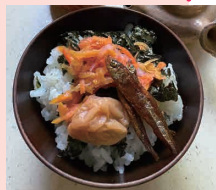
▲園主の備藤行裕さん



夏のやさしい料理

ニンジンパワー

色とりどりのニンジンの葉は、水で洗い柔らかいところをポリ袋に入れて冷凍したら、揉んで小さくして保存して味噌汁のトッピングとして、またサラダに振りかける等々、用途を問わず大活躍。千切りおろしにしたニンジン水を水から沸騰して、2～3分でザルに上げそのままに。冷めたら瓶に詰めて酢を注ぎ、和にも洋にも使い易く夏には重宝します。



▲P2に掲載の「見沼たんぼのたのし農園VEGE∞はちみつファーム」のカラフルニンジン。



▲店先には切り花や鉢物が並び



▲広い店内には新鮮・安全な農産物

体にやさしく美味しい野菜を目指す「見沼たんぼのたのし農園」

代表の諸橋豊英さんは4年前に脱サラし、国道463(浦和一越谷)線沿いの大牧地区で約5反の畑を耕しています。農業・化学肥料等使わず、畝に草を積み上げた不耕起の畑で、30種以上の自然のままの野菜を栽培し、更に3年前から蜂蜜作りも始めています。

諸橋さんは有機又は減農薬で栽培する農家が集まった「さいたまCityふぁーまーず」代表も務め、顔が見える野菜、生産者と繋がるマルシェも開催しています。畑での直売の他、近くのJA、カインズ美園店や下記の店でも購入できます。

・米工房ひろおか(浦和)、天然酵母バンMOKO(東浦和)、ちひろ珈琲(東大宮)、misu's Kitchen(食材として納入:浦和)
・品目:ニンジン、ナス、トマト、アスパラ、ブロッコリー、大根、じゃがいも、ネギほか

緑区大牧女体下1550 *大牧小学校の畑の隣、国道463号沿いの南側「新鮮野菜」のぼりが目印

TEL.080-3360-3557

営業日:土・日・水曜の9:00 ~ 15:00 (売れ切り次第終了)

営業日はインスタで案内

人気の直売所「安心館シャキシャキ」

JAさいたま木崎ぐるめ米ランドは、地元農産物の販売拠点として2012年にオープンし14年たちました。野菜、果実、加工品、切り花、鉢植えでも人気の直売所です。

売り場面積約330m²で、JAさいたまで最大の規模を誇る直売所となっています。

店内には地元生産者が手塩に掛けて栽培した、新鮮で安全・安心な農産物や切り花や鉢物を豊富に取り揃え、すべて国産の物を取り扱っています。

お米やお米の加工品も扱っており、「さいたま市産特別栽培米「コシヒカリ」を100%使用した『ぐるめ米だんご』をはじめ、『お赤飯』や『おまんじゅう』を作っています。

浦和区領家4-24-16 TEL.048-834-2890

営業時間:10:00 ~ 17:00 定休日:第2・第4木曜日・年末・年始

駐車場:普通車最大58台



▲右から諸橋さん、VEGE∞はちみつファームの伊藤さんと田中さん



▲不耕起の畑



▲農園の遠景



▲のぼりが目印

見沼の環境活動のご紹介

「見沼で『モリンガ』栽培実験」について

埼玉大学大学院理工学研究科 教授 藤野 毅さん

見沼たんぼの休游地の活用

人口の高齢化によって見沼たんぼに休游農地が増加し、行政も活用に変えていました。その一つの活用事例として現在注目されるのが「モリンガ」の栽培です。モリンガは元来、インドやアフリカに自生するアブラナ目の木本植物で、日本では沖縄で栽培され、多様な栄養素の他に抗酸化作用があり健康維持食材として活用されています。これが2年前から産学官連携の実証実験として始まりました。

環境保全の貢献について

モリンガは本州で栽培すると冬に枯れます。そのため国内の栽培は定着しておらず、モリンガの効能を知る人は少ないです。他方でその効能を知る人からは見沼たんぼの栽培に大変驚かれます。また、モリンガは外来種なので周囲の農地を荒らさないか懸念も持たれます。ではなぜモリンガに注目したのでしょうか？実は実証実験の目的は温室効果ガスの吸収がどれくらいかを明らかにすることでした。きっかけは、地元の方が興味本位で栽培したモリンガが大きく成長し、ネット記事にはモリンガのCO²吸収量がスギの50倍と記され、その実態解明を埼玉大学に依頼したのです。

結果、見沼たんぼのモリンガのCO²吸収量は5月の播種から9月まで3kg、これはスギの2~3倍と判明しました。植物としてはこれが妥当で、同じ時期に栽培するヒマワリの300倍です。

二酸化炭素の「固定」は炭化で実現

温室効果ガスの削減にはCO²を「固定」する必要があります。モリンガが食材として使用されるのは葉と茎のみで幹と根は残りバイオマスとして活用します。越冬しないことを逆手に、これらを「炭化」することで、毎年一定量の炭化物が生産可能です。

見沼たんぼの自然が“育む”モリンガ

見沼たんぼのモリンガ栽培は以前は想像しませんでした。これは温暖化が進んだためです。おとしから開花も見られ、実(発芽しない)もつけます。受粉はクマバチが行います。モリンガは土壌を柔らかく水はけを良くするだけで良く育ち、肥料や農薬は不要です。従って土壌の生物相も豊かです。ブルーベリーと違い害虫であるチュウゴクアミガサハゴロモの温床にもなりません。アフリカではモリンガハチミツも盛んに作られ、養蜂家の方が挑戦しています。多様な見沼たんぼの一つの特色になりつつあります。



▲モリンガ幹から作成した人工芝用チップとPFAS(有機フッ素化合物)除去が可能な炭



▲藤野先生(左から2人目)と研究室のメンバー

スポーツを見沼田んぼの新文化に!

片柳棒高跳びクラブ(KPVC)の誕生

20年ほど前、片柳中学校で棒高跳びの指導などを行っていた川上康夫先生は、片柳中学校南に広がる見沼田んぼの地でスポーツの拠点を作りたいと場所探しをしていた。



退職の5年ほど前、中学校から約1kmの見沼田んぼに面した地にある料亭から使われていない農地を借りることができ、近隣の学校で使われなくなった資材などを集めてコツコツ手作りで整地や設備設置をした。

「片柳棒高跳びクラブ」が誕生し代表になったのは退職後、今から10年ほど前。最初は片柳中学校の生徒や卒業生だったが選手の目覚ましい活躍で注目されるようになり、小学生からシニアまでスポーツを目指す幅広い年齢層の人々が集まってきた。

シンボルはオレンジックオーク



見沼田んぼの農地と斜面林の緑に囲まれたフィールドはオリンピックオークや桜などの他、日々成長する様子

見てとれる茄子やキュウリも植えられている。

多感な中学生たちも自然と人の豊かな環境のもと練習に励み、全国中学校で男女とも常に上位に入る成績をつづけ全国優勝3連覇している。

特に令和7年度全日本中学校陸上競技選手権

では男子棒高跳びの部において優勝と2位! 2人とも日本記録を更新という快挙を成し遂げた。

突然降って湧いた試練

3月10日未明、不慮の火事災害事故によりクラブの棒高跳び施設、100本以上のポール、トランポリン、倉庫すべて燃え尽くされた。

困った選手たちの落胆した姿に保護者が中心となり「練習施設火災復旧支援プロジェクト」を立ち上げ、SNS などを通じ支援の輪を広げ支援金や支援物資が集まった。

助走路に敷いてあったパレットなど火災残渣整理だけでも時間と多額の経費がかかったがなんとか棒高跳び練習施設だけは完成し、選手たちは6月の県大会に向け暗くなるまで練習に励んでいる。



農業とスポーツの共生を目指して

残念なことに近隣の子供達は野外を利用した遊び空間がまだ完全で無く、以前のように来ないという。

近頃デジタルデトックスへの対応策としてアグリスポーツという考えがある。スポーツを見沼田んぼの新文化にと頑張る川上代表の周りに今日も人は集まっている。



▲農家の薄田さん(左端)とスタッフ



▲採れ立ての真竹

土呂直売所

JR土呂駅西口で、リーダの薄田さんを中心に地元農家の方々が家族的な親しみのある雰囲気、新鮮な野菜を販売しています。早く行かないと希望の野菜、果物などが売れ切れてしまいます。開店の午後2時前には行列ができるほどです。採れ立ての真竹やミニトマトなど人気の野菜です。

北区土呂町1-12(土呂駅西口前) 営業日時:火・木 14:00 ~ 17:00

取扱品目:野菜、果物、花、米、サトイモ、ハツ頭、栗、柿、竹の子、キョウイモ、エビイモなど

農家・市民・行政をつなぐ、さいたま市ランドコーディネーター協議会主催

農家見学会・講演会付きツアーのご案内



2026年7月25日(土)

集合場所:浦和駅東口またはブルーベリープラザ浦和
コース:9:00 浦和駅東口1番乗場 9:20/320円
⇒9:45 念仏橋→10:00 ブルーベリープラザ浦和(各自支払い。お一人様1,000円(3歳~) 時間無制限食べ放題です。※3歳未満は無料持ち帰り料金100g/220円~) 11:00→農業訓練センター「さいたま市農業交流公園について」(農政課) 12:00 解散
→12:29 念仏橋→12:55 浦和駅/320円。なお、駐車場は大崎運動公園の駐車場があります。

申込み先:ランドコーディネーター協議会 黒澤兵夫
kurosawa@peach.ocn.ne.jp(氏名、携帯電話、人数)
(※ツアーは障害保険に加入していません。必要でしたら各自ご加入ください。)

募集人数:15名

さいたま市ランドコーディネーター会員を対象に、都市農業の理解深化、地域農家との交流促進、そしてさいたま市農業交流公園施設の機能、設備の都市農業としての最新の展開や動向を学ぶことを目的として企画するものである。参加者は9時に集合し、市内の農業施設を巡りながら、実地体験と講義を組

み合わせた学習機会を得る。

まず訪問する備藤ブルーベリー園(ブルーベリープラザ浦和)では、都市近郊型果樹農園の経営実態を学びつつ、ブルーベリー摘み取り体験を通じて、観光農園としての収益モデルや地域住民との関係構築の工夫を理解する。園主からは品種管理、鳥獣対策、直売戦略など、現場ならではの知見を共有していただく。

会場を移し(農業訓練センター)農業交流公園(2027年4月オープン)の説明、都市農業の情報発信拠点としての役割、地域住民・学校・企業との連携事例、加工体験やマルシェ運営などの取り組みを視察する。ここでは、ランドコーディネーターが地域の多様な主体をつなぐ際の実務的ヒントを得ることができる。施設スタッフとの意見交換を通じ、都市農業の価値を市民に伝えるための展示・広報・イベント設計のポイントを学ぶ。

本ツアー全体を通じて、参加者は「現場を見る」「地域資源・施設を知る」「技術を学ぶ」という三つの軸を体験的に理解し、ランドコーディネーターとしての活動に直結する知識とネットワークを獲得することを目指す。終了後は参加者同士の交流時間を設け、今後の連携や企画立案につながる関係づくりを促す。

①備藤ブルーベリー園(ブルーベリープラザ浦和)

当園は、市街地に近接しながらも豊かな農地環境を維持している都市近郊型果樹農園であり、観光農園としての成功事例として知られている。園内では複数品種のブルーベリーを栽培しており、品種ごとの熟期の違い、甘味・酸味のバランス、樹勢管理の工夫など、果樹栽培の基礎から応用まで幅広い知見を得ることができる。摘み取り体験を通じて、参加者は消費者目線と生産者目線の双方を体感し、都市住民との交流を軸とした農園経営の価値を理解する。また、園主からは鳥獣害対策、灌水管理、直売所運営、SNSを活用した集客など、都市農業ならではの課題と工夫について説明を受ける。ランドコーディネーターとして、地域農家の魅力発信や体験型農業の企画に活かせる実践的な学びが得られる。

②さいたま市農業交流公園(2027年4月オープン)

農業交流施設は、市民・農家・企業・学校をつなぐ地域連携のハブとして機能しており、都市農業の価値を広く伝える役割を担っている。施設内には展示スペース、加工体験室、マルシェ運営機能などが整備され、農産物の魅力発信や食育活動、地域イベントの企画・運営が行われている。視察では、施設スタッ



▲農業交流公園

フから運営体制、来館者層、学校連携の実例、企業との協働プロジェクトなどについて説明を受け、都市農業を地域資源として活用するための実務的ポイントを学ぶ。ランドコーディネーターにとって、地域の多様な主体をつなぐ際の「場づくり」「情報発信」「協働設計」のヒントが得られる。また、展示の工夫やワークショップの設計など、教育・広報の観点からも参考となる。

体験や交流施設はランドコーディネーターにとって、農家支援や地域プロジェクトの企画に直結する知識となり、都市農業の未来像を描くうえで重要な学びとなる。

見沼たんぼの中心地域の高速道路計画に反対する 第一次の「5,412名の署名」を提出してきました。

5月27日 大宮国道事務所、さいたま市道路政策課、村井英樹衆議院議員事務所にて2023年10月以来、2年6ヵ月間の署名活動の結果を提出してきました。

署名活動にお力添えいただいた皆様にはありがとうございました。

5月28日には、さいたま市政記者クラブで、反対署名の提出の「記者会見」を行いました。記者会見の中では下記の6点を主に強調しました。

- ①2021年から5か年も検討を続けていて、高速道路の事業主体がいまだに「未定」であること
- ②『検討委員会』では、首都高埼玉新都心線を運営する(株)首都高速が、「オブザーバー参加」のままであること。
- ③東京・埼玉・千葉・神奈川の4都県にまたがる広域幹線道路にもかかわらず「国土交通省本省の担当課」も答えられない状況であること。
- ④片側1車線の首都高埼玉新都心線に、新設する片側2車線の高速道路を接続することには無理があること。



▲さいたま市政記者クラブでの記者会見

- ⑤首都高埼玉新都心線について、「現時点では、首都高埼玉新都心線が将来的に核都市広域幹線道路として位置付けられるかは未定である。」と答えていること。
 - ⑥完成が30年先になる見込みの中で、人口推移などから交通状況等も大きく変化が見込まれ、5,000億円もの税金を投入しての事業は、不要であり無駄であること。等をお伝えしました。
- 今後については、「第二次・高速道路計画反対署名活動を持続的に展開し、計画案の撤回を目指していくこと」をお伝えしてきました。

見沼たんぼの自然の保全活動を行なう「グラウンドワーク川口」

見沼の湿原を保護・育つために市民・企業・行政が協力し、平成10年12月に発足しました。活動は見沼代用水東縁の川口自然公園・見沼自然の家を中心に、湿原の里づくり、田んぼ・野菜作り、更に貴重な動植物の保護を目的に原っぱづくりやアシ原の管理を行っています。

今年のイベントでは4月ヨモギ餅つきと春の野草を食べる会、6月田植え、8月夜の観察会とカキシづくり、10月稲刈り、12月収穫祭としめ飾りづくり、2月見沼クリーン活動を予定しています。そして毎月第3土曜日に小学生を対象とした自然観察やものづくりを行ない、更には見沼自然学校で市内小学校の総合学習、行政と協力した観察会や他の団体との幅広い交流も行っています。

毎週水・土曜日の10時～15時に活動しているので、興味のある方は一度「川口市見沼自然の家」に見学に来てくださいとのこと。昆虫や植物に限らず



▲事務局長の岩崎悦夫さん



▲活動エリア



▲自然学校区域



▲見沼自然の家

生きものに詳しい方・好きな方を募集しています。

問合せ先:グラウンドワーク川口事務局長 岩崎悦夫さん
TEL.048-287-3432

活動場所:川口市行衛649 (川口市見沼自然の家周辺)

「だいふくファーム」園主 宮田順子さん



▲宮田順子さん

中高生の頃から環境問題に関心があり、農業にも興味がありました。短大卒業後は20年以上一般企業で会社員でしたが、コロナ禍に家庭菜園を始めたことをきっかけに、野菜栽培の楽しさに触れ、学生時代には農業に興味があったことを思い出しました。人の食を支える農業に魅力と職業としての可能性を感じ、身近な野菜を栽培・販売して生計を立てていきたいと考え、就農を決意しました。2022年春に脱サラし、さいたま市の農業研修(明日の農業担い手育成塾)を経て2022年7月新規就農。認定新規就農者。

さいたま市内で農業及び化学肥料を使用せず、また固定種の栽培・種取りにより肥料費及び種苗コストを抑えた経営を行い、自然栽培を実

践し直売所等での販売を行い年間250万円の所得を目標としております。地産地消推進のため販売先はさいたま市内を基本とし、地球環境への負荷低減のため農業機械はシェアリングサービスを活用しています。さいたま有機都市計画に所属しています。地域農業への活性化に努めつつ、小規模経営で堅実な利益向上を目指したいと考えています。

主な栽培品目(約5反の畑):里芋、オクラ、モロヘイヤ、赤紫蘇、菊芋、ニンニク、リーフレタス他多数

主な販売先:JAさいたま直売所(木崎)、自然食品店(さいたま新都心)、パン屋委託販売(浦和)、個人への野菜セット共同販売

見沼区見山21、22



▲自然栽培

夏のガイドツアー 厄除けの「氷川女體神社 名越の大祓え」ツアー

2026年7月31日(金)

集合:東浦和駅前広場 13:45(小雨決行)

「輪くぐり」「大祓え」と呼ばれる行事で、江戸時代より続く名越しの行事です。月遅れの7月31日、罪穢れを人形に移し、社頭を流れる見沼代用水西縁に流します。その後、境内の鳥居に取付けられたマコモという植物で作った輪を「8の字」にくぐります。罪穢れを人形に移して水に流し去らせることにより、悪疫を防ぎ、秋の農繁期の健康を祈願するものです。昔ながらに神官・氏子・参拝者が同時に一体となって行われる貴重な神事/お祭りです。ご一緒に参加しませんか。

コース:東浦和駅⇒朝日坂上バス停⇒氷川女體神社(名越の大祓え参加)

→見沼氷川公園→芝原小バス停⇒東浦和駅(16:45解散予定)

●歩行距離:約2km、歩行時間:約2時間

●参加費:300円(別途バス代・人形代)

※ツアーは傷害保険等には加入していません。必要でしたら各自ご加入ください。

申込:黒澤兵夫 メール:kurosawa@peach.ocn.ne.jp

TEL.080-1038-6712 FAX.048-687-5543



▲申込はこちら



▲ホームページ

今号に掲載された、見沼たんぼ地域のお米・野菜・果物・花木 直売所等マップ



市民が応援する見沼たんぼ地域での人と環境にやさしい都市農業の広報誌
「見沼・旬彩」2026年 夏号 vol.37

発行：未来遺産・見沼たんぼプロジェクト推進委員会

<https://minuma-miraiisan.jp> e-mail: minuma@minuma-miraiisan.jp

バックナンバーはホームページよりご覧になれます。

編集：見沼農業・応援連携部会／デザイン・印刷：アームズ

発行日：2026年6月10日

We
Love
Minuma



この見沼農業の応援連携・季刊誌「見沼・旬彩」は、公益信託 武蔵野銀行みどりの基金様、公益社団法人 日本ユネスコ協会連盟様からの助成金で印刷・発行しております。